九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『集団回想描画法入門ー認知症高齢者のケアとアートの可能性ー』　緒方泉 著

岡, 幸江
九州大学

https://doi.org/10.15017/26730

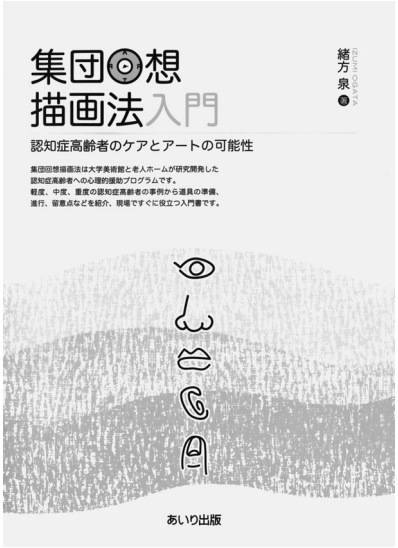
出版情報：生活体験学習研究. 12, pp.67-68, 2012-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本生活体験学習学会誌　第12号　67－68（2012）

『集団回想描画法入門
―認知症高齢者のケアとアートの可能性―』

緒方泉 著



「したいことがしたいようにできる場がここにある」

表題の「集団回想描画法」は、著者らが老人ホームで学生らも交えて月１回ひらく「芸術教室」の日々から生まれた。高齢期を迎え、認知症を発症し、日々の記憶が薄れていくなかで不安や恐れを孤独にかかえる人々が、「小さなことでもできることをともに探す」援助者とともに、記憶につながる四季の素材等から回想し、絵を描き、描いたことからさらに回想し語らう。そうして得たなにがしかの「できた喜び」を、参加者とともにわかちあう。実践にもとづき詳細に記された記述からは、支えるに足る適切な場と関係があれば、重度の認知症に至っても新たな語りを生み自分の思う描画を実現できることが、確かにうかがえる。その老いの姿には、人間の尊厳というものをしみじみ思わされる。

本書は、著者が2008年に九州産業大学大学院国際文化研究科に提出した学位論文を基に、執筆されたものである。が、タイトル通り本著は、著者が実践の中から開発した「集団回想描画法」という認知症高齢者に対する心理的援助プログラムの「入門書」でもあり、実践者目線で援助の際の準備、進行、留意点などが具体的に記されている。一般には両立しがたい２つの性格をあわせもった著となっているわけである。

まず本書の構成をご紹介したい。序章ののち、本書は３部構成となっている。「認知症高齢者に対するさまざまな心理的援助法」（１章)、「集団回想描画法開発までのプロセス」（２章）でなりたつ第１部では、認知症高齢者に対するさまざまな心理的援助法やそれにかかわる先行研究が紹介され、対する本援助法の特性が明らかにされる。と同時に集団回想描画法とは何かが、着想・開発に至る出来事や人との出会いを通してうきぼりになる記述法がとられている。続いて第二部では、軽度（３章)、中度（４章)、重度（５章）の認知症高齢者の事例研究が、毎回、どんな季節にどんなものを通して何が語らわれ、実際どんな絵や作品が創作されたかの写真も交えながら記されている。最後に第３部では、「集団回想描画法を考える」として、改めて本援助法の特性をさぐるとともに各種指標や高齢者施設職員へのアンケートを用いて、客観的評価が試みられている。

「集団回想描画法」とは著者によれば、認知症高齢者に対する心理療法のうち、とくに感覚刺激に働きかける材料をふくむ回想法・音楽療法・絵画療法を統合するものとして開発したものだという。「日本の風土に育まれた四季折々の自然風物を用いて感覚刺激にはたらきかけて語りながら描いていく」ものであり、「次第に視覚化されていく画面を見ながら、さらに語りつぐことが可能になるもので、参加者の回想から新たな気づきが生まれるとともに、援助者も参加者の個人史、内的世界を理解できるという心理的援助法」と位置づけられている。

さて本書を通読し、本研究は心理臨床を学問的バックボーンにおきながら、一方で著者が社会教育や文化行政および関連施設職員の実務経験をも持ちあわせていることは、本書に描かれている援助法の開発過程や援助の実際に少なからぬ影響を与えていると思わずにいられなかった。本援助法は心理療法の延長上にありながら、以下に見るように、環境を形づくることによって人の育ちあいを促す社会教育的視点を重要な輪郭に持ち合わせるものとも思えたためである。そこで本稿では、本学会の性格をも鑑み、社会教育研究に携わる立場にある筆者が本著をどの

ように読んだかに即して記すことをお許しいただきたい。

まず第一に特徴的に思われたのは、「回想法」と「描画法・音楽療法」を統合したこの集団回想描画法が、認知症高齢者と援助者の「協働関係」あって成立している点である。本援助法は認知症高齢者個人の「治療」ではなく「その人がその人らしく生きる」ことを目的にするものであるというが、その際援助者（とくに本実践では医療福祉専門職でなくボランティアで関わる芸術学部学生であることに注目したい）が二人三脚的に関わっていることはとりわけ重要であると思われる。

学生たちは「どんな小さなことでもできることは探せる」というスタンスを共有しながら、高齢者本人たちの活動の目標設定に、高齢者と協働でとりくむ。対比的に描かれるのは、施設で日常的に行われているリハビリである。そこでは目標を外部から与えられ、高齢者は「できなくなった自分」との出会いを繰り返し、えてして自信を喪失してしまう。しかし本援助法では、絵の描けなくなった高齢者に「描くのが難しければそのまま貼ってみてはどうですか」と学生が声をかけ、高齢者は貼りつけた絵に線を加えるなど、本人に可能なことを模索しながら新たな表現を工夫していくやりとりが成立している。適切な同伴者の存在によってどんなに弱っても小さなことでもできることが発見され、できたことやそれに付随する語りを共有し認め合う関係性のもとに、達成感が積み重ねられるわけである。

第二には、「生活体験」の位置付けと可能性についてである。本援助法では、回想や描画の出発点に、四季、遊び、風景、仕事など、五感に働きかける「なつかしい暮らし」にまつわる生活体験をおき、野菜ひとつ、想起をうながすものを意図的に準備している。

なつかしさやなじみ深さから高齢者の記憶によびもどされた生活体験は、絵を描く、うたう、回想し語り合うといった作業を媒介することによって、表現の深化を促していく。と同時になにより大事と思われたのは、そうした表現の過程を経ることによって、高齢者の内側から「思い出したことを、誰かに知らせたい、伝えておきたい」という他者へひらかれた思いがたちあがってきていることである。生活体験は、単に体験だけではその場限りのものになる。しかし本人の感情・回想・表現の連鎖とつながっていくとき、生活体験は本人と新しい世界が新たにつながる重要な鍵となるということだろう。

この第一点と第二点をあわせて、先に述べた「環境づくり」、いわば場づくり関係づくりによる支援が成り立っている。こうした環境づくりが回想の促進、描画の促進といった手立てとあわせて、本援助法の支援の骨格をなしているように筆者には思われた。

そして最後に、本著の提起は、ナラティヴ・アプローチの視点からみても、新たな展開をなしているように思われる。本著はナラティヴ・アプローチの視点から本援助法の意義の考察を行っているが、これは本援助法のなかで「認知症高齢者の体験過程をふまえた見方への転換」が重視されていることとも符合している。しかし、ただ単に認知症高齢者にナラティブ・アプローチをもちこむだけでは、彼らは時を経るほどにひとつひとつ失うことが増え不自由を生きていくだけに、「失っていく物語」しかつむげないことになる。だが本援助法において、ナラティブはささいなことも傍らで協働作業してくれる人とのやりとりのなかで生まれるものとして位置づいている。協働関係に支えられ活動とともに「生み出されるもの」としての、ナラティヴなのである。

このように本著は多くの示唆に富む力作であるが、一点疑問に思ったことは、この援助法が生みだす世界を著者が「虚構の世界」と位置付けていることである。本研究の今後の展望として本援助法のより客観的で精緻化された評価に向かう方向が語られていた。それも大事だが、一方で、こうした場とかかわりの日常化にむけての実践・研究も、きりひらいていただくことはできないだろうか。たとえば本援助法において援助者自身がどれほど学び変化したことだろう。そうした環境全体の相互的な変化を注視していくことはできないだろうか。先に筆者もリハビリの限界ともとれる記述を行ったが、本来的にはリハビリであっても言語的なアプローチにおいても、本援助法にみるような「環境づくり」による支援は可能と考える。それは「虚構」と「現実」の境界をこえていく力になるものになると、筆者は信じたい。

[あいり出版、2011年、2,625円]

(九州大学　岡　幸江)